

レジデンス・イン・森下スタジオ ヴィジティング・フェロー

イヤッド・ホサミ パブリック・トーク

「Doomed by Hope: Masrah Ensembleとベイルートで演劇をつくること」

□ 開催日時：2014年9月5日(金) 19:00-20:30 □ 開催場所：森下スタジオ

本パブリックトークでは、アラブの春以降、政治や社会の急激な変化に揺れる中東諸国の中で、多様なバックグラウンドを持つイヤッド・ホサミ氏が劇団「Masrah Ensemble」を軸に、どのようにアラブ圏のアーティストやパフォーマーとコラボレーションを行い、また、演劇を実践しているのかについて、これまでの活動の映像を交えながらプレゼンテーションしていただいた。

《はじめに》

イヤッド・ホサミ：

まず、本日お越し頂きました皆様にお礼を申し上げたいと思います。日本に到着したのが1ヶ月ぐらい前で、到着したその日に森下スタジオで公演を観ました。このようなかたちで、皆様とお会いすることができて嬉しく思います。これから数週間、日本に滞在しますが、新たな出会いや出来事を楽しみにしております。

本日は、これまでの私の仕事、私の仲間と一緒につくってきたプロジェクトについてお話をさせていただきたいと思っています。

まず始めに、昨年、レバノンで演出した『Mud』という演劇作品から2つのシーンをお見せしたいと思います。この作品はマリア・イレーネフォーネスというキューバ系米国人が1980年につくった戯曲をもとにしています。アラビア語に戯曲を翻訳し、アラビア語と英語で上演しました。約100年前、オスマン帝国時代に建てられ、今は荒廃してしまった建物の一部を舞台とし、公演期間は3週間、毎回20人ぐらいの観客が集まった小さな公演でした。公演は無料でしたが、お金を払ってくれた人には公演後にエチオピア料理のディナーを振る舞いました。

この作品で、主人公のメイは文字の読み書きを習います。そこで、私たちはレバノンに住む、エチオピアやスーダン、西アフリカからの移民がアラビア語を学ぶ教室を訪れました。そして、公演では、常日頃から劇場に行く人だけでなく、使用人として働く外国人労働者や難民等、これまでとは異なる多様な背景を持つ観客層を迎えることができたことを、嬉しく思いました。

(映像：『Mud』)

私が『Mud』という作品を演出したのは、レバノンに移住してから5年後でした。過去7年間で、私が全編上演するこ

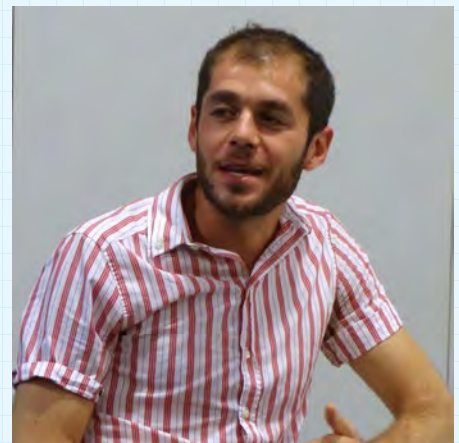
とができた唯一の作品です。私は4年間、貯金をして、何とかこの作品を上演することができました。1982年にフェミニストのキューバー系米国人が書いた作品ですが、キューバー系米国人で、LGBTの作品を支援する環境になかったからです。

《アラブ系米国人であること》

アラブ系米国人のアーティストはニュースで報道される出来事とは異なるイメージを描くと期待されています。私の両親はシリアのダマスカスで生まれ育ち、1970年代後半に米国に移住し、医師として活動していました。そして、私はジョージア州のアトランタの郊外で生まれ育ちました。

9.11が起きた時、私は高校3年生でした。9.11の直ぐ後に、私たち家族は米国の国旗を庭に掲げました。恐怖を感じたからです。私たちは家庭でアラビア語をほとんど話すことはありません。肌の色のおかげで、私は米国社会に難なく同化することができました。私が生まれ育った環境では、アラビア語を聞くよりもフランス語を聞く機会が多かったぐらいです。

私は大人になったらできるだけ早く、米国の南部を立ち去りたいと思っていました。そして、イエール大学で演劇を専攻し、演劇の演出を始めました。当時、作品を上演した場所は、このスタジオや古くからある劇場のような空間でした。しかし、米国の演劇界がいかにかに人種や民族によって分断されているのかを大学時代に身に染みて感じました。そうして、米国以外の場所を探ることが重要だと意識するようになりました。特に、アラブ圏ではどのような演劇が上演されているのかに興味を持ちました。残念ながら、当時の私のアラビア語の語学力は十分ではなかったので、英語とフランス語



イヤッド・ホサミ

で書かれた本でしかその様子を知ることができませんでした。英語とフランス語で読むことができる近代と現代のアラブ圏の演劇に関する本は、非常に情報が乏しく、実際に何が起きているのかを知るためには、旅をするしかないと思いました。

それから、現代のアラブ圏の演劇について書くために助成金をもらうことができたので、リサーチとしてカイロやベイルート、そして、最終的にはシリアのダマスカスまで旅行をすることができました。

《シリアやレバノンでの演劇活動について》

大学を卒業して2日後に、米国を離れ、シリアに移住しました。1年間、アラビア語を勉強して、演劇を作り始めました。その時にもらった奨学金はフルブライト奨学金です。私が初めて作品を上演できた場所は、ビザンチン帝国時代につくられた今は廃墟となった街でした。1400年ぐらい前に建てられた建物です。『A Moment of Silence for Shuhada' of Iraq (イラクのシュハダの犠牲者への黙祷)』という作品を上演しました。私は日の出から日没まで螺旋状に歩き回り、バラの花びらを置きました。それを近くの村の少年たちと私の友人がダマスカスから見に来てくれました。それから、『Mama Butterfly』という作品を書き、今年、出版することができました。父母の叔母にインタビューをしてつくった作品です。その当時から、「Doomed by Hope (希望によって破滅させられた)」という本を書くためのリサーチを始めました。

2007年前後は、シリアと米国の関係が悪化したので、シリアから退去させられました。それ以来、シリアに戻ることができていません。ベイルートに移住し、編集者として働き、仕事の後にボランティアとして演劇界に関わりました。その当時、ベイルートの東のアルメニア人が住んでいる地区に住んでいたのですが、自宅でキャバレーのようなものを始めました。月に一度だけオープンする「欲情の劇場」という名前のキャバレーで、いろいろな人が集まるようになったおかげで、家の近くのアートスペースがプロデュースしてくれるようになりました。そのキャバレーでの活動と「Doomed by Hope」の準備を通じて、数多くのアーティストやパフォーマー、ライター等と関係をつくることができました。そして、そこで出会ったパフォーマーたちと、2011年に Masrah Ensemble を立ち上げたのです。

ベイルートは苛烈な差別、不平等に苛まれている街です。その街に住む人は温かく、気さくに振る舞うのですが、それと同じように人種差別をします。食べ物は本当に素晴らしい街なのですが。私が初めてレバノンを訪れたのは、2006年7月で、ヒズボラがイスラエルと衝突する直前でした。ベイルートやアラブ圏の人口構成は非常に多様です。毎日、少なくとも4つの言語を耳にします。また、ベイルートの人口は大きく変化をしました。その主な要因は移民や難民です。100年前にアルメニア系の難民がトルコからシリアやレバノンにきました。そして、1948年、1967年にパレスチナ系の

難民がレバノンにきました。今は50万人ぐらいのパレスチナ系の難民が住んでいると思います。レバノンは他の湾岸諸国と同様に原油で潤っている国ですが、同時に、奴隷制や人身売買で成り立っている経済がその背景にあります。20万人ぐらいの移民労働者の多くは、エチオピア、スリランカ、フィリピン、インドネシア出身者です。そして、今、レバノンにはシリア系の難民が120万人ぐらいいます。その大部分は18歳以下の人たちです。そのような状況でどのような演劇をつくるべきなのかという命題があります。

今から、映像をお見せしますが、昨年、シリア系の難民の10代の少年少女と行ったワークショップです。来年の1月には大規模に展開したいと思います。

(映像：ワークショップ)

《「Doomed by Hope」について》

「Doomed by Hope」という本は、私がダマスカスに住んでいた頃から始めたプロジェクトで、オランダのクラウス王子基金(Prince Claus Fund)に助成をもらい、2012年に出版されました。先程もお話したように、私の学生時代には、現代演劇に関する本やテキストが非常に少なかったことが動機としてあります。私はこの本をつくるときに、自分よりも50歳ぐらい年上の権威のある学者とともに仕事をしました。また、偶然だったのですが、2011年3月のシリアで暴動が起きた同日に最初の一步を踏み出しました。

このプロジェクトでは演劇界で働くアーティストや学者に声を掛け、1997年に亡くなったシリア人のサーダラ・ワノス(Saadallah Wannous)という劇作家のレガシーについて考察しました。サーダラ・ワノスは1996年の「世界演劇の日」でアラブ人として初めてスピーチをした演劇人でした。「私たちは希望によって破滅させられている。世界でどのようなことが起こったとしても、今日が歴史の終わりにはなるはずはない」という名言を残しています。「Doomed by Hope (希望によって破滅させられた)」という言葉は、ハムレットの「生きるべきか死ぬべきかと(to be or not to be)」と同じように、アラブ圏の演劇界では重要な言葉の一つです。チュニジアからサウジアラビアまで、アラブ圏の演劇人



パブリック・トークの会場

の多くが知っている言葉で、様々なイメージを喚起します。シリアのタクシー運転手でさえもその名言を知っていて、彼らにとっても意味のある言葉です。ここにあるエッセーは、2011年の春に始まった様々な革命が起きている中で書かれました。この本では、文学的な演劇の分析や演劇の上演の歴史、そして、演劇をつくること、演劇を教えることを記述した14のエッセーが収録されています。その半分はアラビア語で、残りの半分は英語で書かれましたが、全てをアラビア語と英語に翻訳しました。また、「Doomed by Hope」はシリアで抗議活動をしている人たちがプラカードに掲げた言葉でもあります。その革命が内戦になっていく段階でも、そのスローガンは取り上げられました。このサーダラ・ワノスという劇作家は聴衆を喚起し、悪政に対して反抗するように訴えていたからです。

この本を出版したことによって、演劇を上演する様々な機会を得ることができました。例えば、米国やヨーロッパ、オーストラリアに行き、ワークショップをしたり、新作の一部を見ることができました。

《Masrah Ensemble の新しい取り組み》

2008年から2012年は演劇をつくるだけでなく、演劇をリサーチし、プラットフォームをつくる活動を行いました。結果として、様々なコラボレーションが生まれ、今年は新作の創作を委嘱する新しいプロジェクト、「Triangle」を始めることができました。2つの戯曲の創作を委嘱し、4つの翻訳のプロジェクトに取り組み、ベイルートとニューヨーク、バクダッドでレジデンスを行いました。リーディングやワークショップなど、24人以上のアーティストとともに活動しました。

今から、映像を観ていただきますが、そのイントロダクションが英語で書かれているので、その前に簡単に説明します。「Triangle」はワーク・イン・プログレスのフェスティバルで、観客との対話を通して3つの演劇を取り上げるプロジェクトです。ベイルートとニューヨークを拠点に、様々な言語を話す人々、コミュニティと関わりながら、レバノン、シリア、イラク、米国のアーティストとのコラボレーションをし

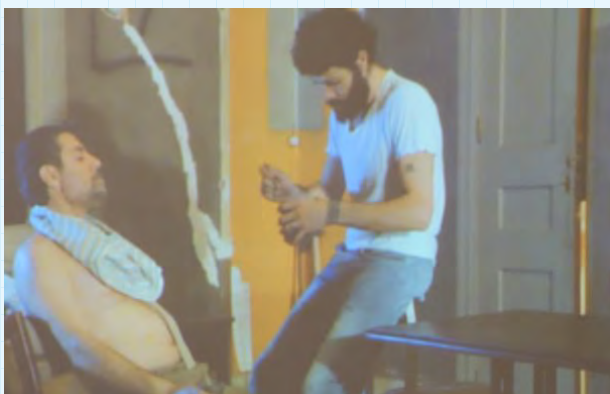
ています。Masrah Ensemble の企画で、アーティストと観客の間に新しい関係を見出すことを目的としています。その際に、観客がその中心的な役割を担うような活動を目指しています。

(映像：「Triangle」)

日本でのリサーチに興味を持っていることは、ディアスポラ、移民、現代のパフォーマンスです。特に、タガログ語を話すフィリピン系の移民、ポルトガル語を話すブラジル系の移民が、日本でどのような活動をしているかに関心があります。それは、タガログ語やポルトガル語を話す人たちが、演劇やパフォーマンスにどのような関わりをしているのかということです。

今月末に、皆様のご協力を得て、ワークショップを実施したいと思います。プロフェッショナルであるかどうかは別にして、アーティストや学者、翻訳者の方々にご協力を得たいと思います。フィリピンやブラジルの演劇の事情に詳しい方、移民について詳しい方がいらしたら、是非、その情報を教えていただきたいと思います。例えば、東京のフィリピン人のカラオケのお店に詳しい方からの情報も、歓迎いたします。

(以下、質疑応答略)



『Mud』(2013)



「Triangle」(2014)

ヴィジティング・フェロー 滞在概要

イヤッド・ホサミ シリア、米国、フランス/レバノン(活動拠点)

演出家、作家、Masrah Ensemble 主宰

2014年8月9日(土) - 9月26日(金) 滞在

テーマ：From the page to the stage: 日本のオルタナティブからの新しい劇作

内容：日本の現代演劇で取り上げられるテーマや論点とともに、コミュニティ、移民、ジェンダー、アイデンティティ等のマイノリティ(少数派)の芸術活動についてリサーチを行った。滞在中、劇作家や演出家、翻訳家、関係者との面会の他、日本に居住する外国人や日雇い労働者と協働するNPOを訪問してネットワークをつくり、ディアスポラ(母国を離れて暮らすコミュニティ)から芽生える現代の舞台芸術について考えるワークショップを行った。

[ワークショップ]

「Performing Arts from Diaspora：ディアスポラの舞台芸術」

開催日時：2014年9月20日(土)・21日(日) 14:00-17:00

開催場所：森下スタジオ

内容：言語的にマイノリティの立場にいる人々によるフォーマルまたはインフォーマルな演劇活動について、これまでの活動のストーリーや情報を共有し、多様なディアスポラ(母国を離れて暮らすコミュニティ)から芽生える現代の舞台芸術について考えた。

[滞在後の展開]

富田克也監督の映画『サウダーヂ』のスクリーニングイベントをバイルートで解題予定。また、国際演劇協会日本センターとの共同企画で、パレスチナ・シリアの劇作家、Yasser Abu Shaqra の『Before Dinner』を、2015年12月、日本で発表予定。



イエール大学で演劇学を専攻。大学卒業後、シリアのダマスカスを拠点に活動を行うが、シリアの政治情勢の影響を受け、レバノンのバイルートに拠点を移し、演出家、作家として活動している。

2011年に「Masrah Ensemble」を設立し、近年では、アムハラ語、アラブ語、英語の3言語を繋ぐリーディングシリーズ「Triangles」に取り組み、アラブ圏のアーティストとともに活動を行う。また、アラブ圏の現代演劇と社会情勢の変化の関係をテーマとしたエッセー集「Doomed by Hope: Essays on Arab Theatre」を監修し、2012年に出版した。